



# 現場から

教科書p.56~57

## 日本の伝統技術を伝える職業 和傘作りに日本の物作りのこだわりを見る

〈訪問先〉株式会社 日吉屋 西堀 耕太郎 さん

日本の伝統技術を受け継ぐ京都の和傘屋「日吉屋」の職人・西堀さんに、日本の伝統を受け継ぐ苦労や仕事のやりがいについて取材に伺いました。和傘ならではのこだわりや制作の難しさなど、日本の伝統を継承することの大切さと難しさをお話いただきました。

❶和傘作りを始めたきっかけについてお聞かせください。

この日吉屋という店は、ぼくの妻の実家なんです。ぼく自身はこういった環境に生まれ育って、これを継いだというわけではないんです。

ぼくは、高校を卒業した後、カナダに留学していたことがあります。いろんな国から来ている留学生がいるんですが、日本のことを聞かれたりするんですよね。いざ外国に出て日本のことを聞かれると、ぜんぜん知らないのでもって困ってしまったんですね。歌舞伎だとか、お茶だとか、芸者だとか、聞かれてもわからないわけです。それで恥ずかしい思いをしたこともあって、外に出て初めて「日本人だ」ということを意識しましたし、日本の文化や日本のことについて考えてみるというきっかけになったんです。そして、帰国して京都に遊びに行き、初めて本物の和傘に触れた時に、強く感銘を受けたんです。

いまでもそうですが、当時も和傘を使う人がほとんどいなくて、店が成り立たないですから、もう店を閉めようか、という話をされていたんです。たとえば裏千家という茶道の家元が使う大きな傘なんですけど、このタイプの傘というのは日本でここだけしか作っていないものなんです。この店がやめるとその傘がなくなって、伝統的な野点のシーンが消えるということです。やっぱり



傘の骨のぐあい、どのように張っているのか、美しい姿になるのかを、編集者に説明。



傘のぐあいをみる西堀耕太郎さん。  
これからの姿を思い描き、その目はしだいに細くなってゆく。

こういうものは残していかななくてはと思ったんです。

ぼくが和傘をやっていくと決めるまでは、だいぶ時間がかかりました。前の仕事をしながら、週末はこっちに通って職人さんの仕事を見たり勉強したり、材料を持って帰っては家でやったりしながら、始めたんです。やはり、作ったものが売れると非常に嬉しいわけです。いまは、茶道などの継承とか文化財的なものも直したりしていますから、役に立ってるという実感がありますね。いまは和傘を「こんな素晴らしいものもありますよ」って胸張って言ってもいいんじゃないかと思えるようになりました。

❷和傘作りのこだわりと、制作のポイントについてお聞かせください。

江戸時代中期以降、大量に安く作ることができるようになって、一般人も使えるようになったんです。広重の絵には、ぼくらが考えていたよりもたくさんのシーンで、傘が使われているんです。日傘の場合もありますね。

蛇の目傘という傘ですと、ただ単に雨をよけられたらいいということではなくて、おしゃれで「着飾って美しい」という、ファッションアイテムなんです。いま、日傘なども流行していますが、日本の文化の中で傘は、雨よけという面もありますが、おしゃれを楽しむアイテムでもあったということです。

長い歴史の中で様々な派生が生まれて、たとえば茶道や日本舞踊、歌舞伎などでも、傘は使われているんで

す。「助六」という非常に有名な歌舞伎の中ですが、助六は見得を切るためにバツと蛇の目傘を広げるわけですね。でもそのシーンは晴れであって雨じゃない。非常に大事なアイテムとして使われているんです。だから、単に雨よけではなくて伝統芸能という美的なものだ、という捉え方もされています。

江戸時代の中期以降になると、だいたいいまの作り方が確立されてきます。つまり一本の竹を割って骨組みを作り、和紙および絹や布を型紙に沿って裁断して貼って。雨傘になると、防水のために油をひいて乾かすとか、そういう作り方が確立されたんです。いまやっているのもだいたい江戸時代にできた作り方をそのまま継承していますね。変わっているところも若干ありますが、たとえば糊が当時はわらび粉だったものが、いまはタピオカ粉に代わったりとか。部品が紙だったものがビニールになっているものもありますが、基本的には構造とか作り方は変わってはいない。

ただ難しさというところでいくとやっぱり相手が自然物ですから、竹といたしましても一本一本節も違うし、成長の具合によっても全く異なります。和紙を貼るのも、その日の気温や湿度によって、含ませる水分の量が違ったり、ほんとうに微妙で細かな調整をやらねばいけない。また、手作業で自然物を扱っているんですけど、均等で美しく真円に近い形を求められる。そういう風に作ることは非常に難しいことなんです。

一本の傘を完成させるのに、とても長い時間がかかります。乾燥工程もありますし。竹を山から切ってくるところから数えると、半年くらいかかって一本の傘ができるんですね。すごい時間と人手、手間がかかるわけです。現在、ここでは4人で制作していますけれど、骨を作っている人や木の部品を作っている人、和紙をいれる人もさらにいますから、全員が集まって一本の傘になるんです。

いま、この分業制が崩れて受注や生産が非常に少なくなっていますが、実は、和傘の最盛期は、昭和の初めごろであって江戸時代じゃないんです。昭和10年代には、全国で年間1400万本を作ってたんです。

❸和傘の魅力についてお聞かせください。

やっぱり長い歴史の中で作られたデザインですから、非常に美しいですね。また、洋傘とはかなり異なっているんです。

ひとつの大きな特徴は、骨数が非常に多いということがあります。骨数が多くなるとどうなるかということ、シルエットが丸くなるのですが、それが洋傘と違う、



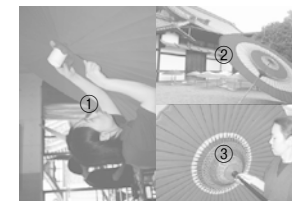
一番気になる部分の作業。骨と骨の間に和紙をおき、のりでつないでゆく。窓の向こうはお寺で、晴れると傘を干している。

造形的にきれいだと思うところですね。日常的な番傘という和傘もあるんですが、骨に糸飾りをしたり、模様があったりとか、差してとても楽しい、雨の日は待ち遠しくなるような傘なんです。

たとえば童謡で「あめふり」の中で、「じゃのめでおむかえうれいな」の傘は蛇の目傘のことだし、子どもは嬉しかったんですね。だから実用優位でコストなどばかり追求するだけでなく、もう少し余裕を持って雨の日が楽しくなる傘を持って、人と違う自分なりのおしゃれとして雨を楽しむ生活のゆとりが、和傘にはあるのではないかなと思うんです。

傘は閉じていると、結構区別がないというか無愛想なんですけど、開くとほんとうに華やかで、閉じている時と開いている時の表情が異なるんです。開かないと見えない骨の糸飾りというものは、中から見て楽しむんですね。差した人が楽しくなったりきれいだなと思ったり、外からはわからない装飾の仕方をしています。開いたら初めてぱっと華やかになるみたいなのところがあるんです。そのような、中を開いて感じるところは、着物の裏地にこだわったりする部分に通じるものがありますよね。とても日本的であると思いますね。

### 表写真解説



- ①和紙の張り込み：昔と変わらず、手作業で一本ずつ丁寧に張り込んでいく繊細な作業である。
- ②傘の天日干し：お店の向かいの宝鏡寺の境内で、傘に塗った油を乾かす。油をひいた和紙は、朱から深い紅に色を変える。
- ③骨組みと飾り糸：差さない見えな骨にまで飾り糸を巡らし、差す人の楽しみを演出する。